大正六年十月八日寄
高田早苗氏贈

射法の奥傳極意之書

一 足踏乃事

足踏みハ左りの足を前に出すとの者えるハ
しかし扨右の足を前に中ハ後に的ちの
ほゞ合をしてかゝとを開きて人の
矢尺ハ三尺ハ八文字ニハ
押ゆの太指と左りの乳先と約合に勝ゆる
也の太指と右の足踏と約合をして始もるく
き、中ハ五寸足踏曲ゆ人けん用に応べ
但古実伝来の書に人の大小にしたがい
足踏廣さ三尺五寸又七八寸と云へ
り先ハ久安伝に基るうちに三尺と記
尺の書遠して誠ハ弐尺五寸なるべし
天地右應の約合先ハその人〳〵の矢尺
意〳〵足踏拵る事也うて

二 一たてゝ乃事

先ハ一ハ弓を孫二ハいの氣三ハ腰に勝
ゝハ足をかゝりの事
但たて横の内の事ハ前〳〵の書しを有
いとも射法ちとの射るとの事を云記書
ちれハ変れとも行〳〵ちのとり

三 一横ゝ乃事

先ハ一ハ押ゆうて首二ハ引三ハ肩根に

二一たてゑぶくろの事

先ハ一ハ弓を称二ハいの氣三ハ腰ニハ勝
ゑハ是なり

但たて横の内の事ハ前〳〵の書しも有
いしとも射ざるよりの射術をハ記書
ゆれハ是にしたがへるべきなり

三一横ゑぶくろの事

先ハ一ハ押をうて首二ハ元ニ三ハ肩根ニハ
右の肩根ゑと水の尾ちり　水の尾とハ付尾ちり

たて横ゑぶくろ完の内ゑぶくろ
ゑぶくろを拵〳〵十文字又大文字

一胴作りの事

胴作りハ横すぢにたて中ずゝかるさる板
ゆ三腰の下〳〵おしほどゑをくり毛板〳〵
ゆりのとりけりの事〳〵つけて裏る胴を見し
ゆ三面

五一ちぶかけ合せの事

大同様をのゑハ弐分程もちぶ言の直
ちゆ下ちゆくのを合ちゆ事ちゆ弦ちゆ
ちるハ下ちゆちゆ弦ちゆて弦ちゆ
弦ちゆ三寸両端湯ちて則弦ちゆ
弦ちゆ矢敷ちゆで大菩に乃へでハ矢の弦ちゆ
ちゆを合せをかゆる事ちゆ

六一をゆ小ちぶ上中下の事

先ハ弓矢さゝ矢を南ちかけよしとゆ
ちぶをるゝをれハ矢うゆ比やのに比
ちゆゝ又的巻藁ちゆ中のをゆ直
根矢ちゆぶハをゆ上ニて射ぶゝ先を上中
下のをゆとい

ちゆゝをてハ矢ちのんゆ故に中の矢ハ中の
をゆて射る根矢ハ矢を動ぶ信ゝをゆ上下

七一ゆ乃内指かけゆ称とゆ事

先ハなけちるゆび〳〵大指のゆ一のゆ事まぶる
ちゆにまるセかゆて中まる事ゆ先をかゆ
称とハゆ〳〵かゆちる心ちゆてハ大指乃下ゆ
ゆの内ちゆちるゝちゆ

弽にて射る根矢ハ矢に動きなく候へし 弽にてよし

七 一 手乃内指に加て持とる事

先ハたけるゆびへ大指の節のあたりにあてる
やうにあてかけて中る事先をかさ
ねとハ言へかさなる心にて大指乃下のき
手の内もあらくさりそれにつけてハ南
悪き事のみ多きものなり

手のうち付ハ手の内四分六分のかねにもずれ勝手の弽合
一 つよく指を越してゐるへよびたる時ハ引納
時ハ手の内つまる也うろこ形三所の紋崩れぬやうに
致すかよし侍

八 一 中押心持の事

先ハ上節もかりそてもちし上エ下タ同しく
持へき也たかいるの生出すハよろしといへど先ハ
二分六分人によりて七分三分にまねせるがよ
四分六分といふハ上エ六分下タ四分のんちなり
七分三分ハ上エ七分下タ三分のこと也なり
但たけなる指乃爪と紙形の上ハ節とをとる
やうにんをすべし手先三脈と云も是也
上節もいつれも節もいつれも骨の並る
りて中すりの中を押し此握よく持を
ちゐへしといへども中すこしずれる
是為なり

弦調して四分六分中節なり七分三分以上ハ上ハ節
なりかゝり上節なり押のかゝりを用る時ハ大指の
根七分にして人差指の根三分之上ハ節中節ともに親指
人差指の根ハ四分六分先よかゝりとするなり

九 一 弓構への事

先ハ身の角下に弓を直押手の肩和かに
左右の付とかる様に弦を息を続
きれるも無理とするハ悪し

先を一の事しと云
三之母の息を初メの息なり懸引和らかに心斤等
らかさる様にするへ息を細むへし

十 一 弦乃事

先人の生れによまていへとも先ハ人差指の
根通り弓を当る様にするへし大指と弦
へ一文字に当て扱三ッの指にをかさね[illegible]
弦かける際ハ悪しく弦握とはいふて云ハ大指

十一
一 弦道乃事
これ人の生れによりまちまちなれ共先ハ人差指との
根通りにかけ渡る様にかけて大指に弦
へ一文字に当テ扱三ツの指にてきしく
弦道高けれハ悪し低けれハ悪しと云ハ大指と
の間横へ当るところふときハ志だるみ様に
なれりするが能くの道さらにかへて引
りのも悪しひねりところの手の内を
考ふべし
但三ツかけにても四ツかけにても的矢ハ流
めにかけひくるがよし差矢ハ矢数
多き調子のかけハのせる斗のかけて
引て射するがよし
弦道口すりけずりてかけ渡るへし弦道は奥へ入りたる
時ハ落て引のかけるなり矢をさげる事
傍出るとするハ控悪し親指に腹筋の内に弦口
おくし山のたがひにを積みせ文塔息をすたる也

十二
一 打上心持乃事
弓の弭を主として弓まゝ形りにて弓を弦
もちさげさるやうにかけ引かけなからいか
にもおもきものを上ぐるように上ぐるこころもちにて
入組りハ下ゲ手を緩腹にもたれ掛けたり
気を二の腹へもらし二に の息の中の息なり
はらへもたるゝ息きたたとぞ云
但篠弦道こころ打ちあげ上り脇の下をえん
するん弦より見て弓狭く手前にむかふなれ
やうに打上るへし
又太き弓のものハ引かけなから打上るが
よし末肩の者ハ二ツ形りにて打上るがよ
初心のうちハいつれ引かけずに打上るが
よし

十三
一 引とけの事
打上の位より息のすなほによつれて虹（ニジ）
形をふくみ遠くにひかひきわけと
肩へ納めゆ弦道こぼし眼通りへ来る
時付よかすべし
太き弓ニ三つの如く大弦の手張ハ向へ弓出し手おへ
あかりてハ弦けびきもあく引流しあかなと

十二

一引上げの事

右上の鉤を引き息のすりようにて虹形をふくめ肩へ鉤めぐらし肩へ鉤めぐらしを引きかけとり時付よんすぐし眼鏡書

大きり三分一の如く大抵の通り抵ハ向へ寄生ほかへ
ゆらりてい初めびらとまわく引流しをかと
時付を出へし大ぶりよりと云也大目三分一と云
同しく大抵ハ三分二向へ抑出す
高ハおへとつて右上へ引流ハ向へ三分二抑出す今ハ此の
角まるをもを作上へ右上へ引流ハ向へ三分二寄る
肩へ寄りへ寄りのすりとかんちり

十三

一勝負をあなし鉤乃事

先ハ引ちも法りもさいかぶるを
に引なりうに法師ハ抵抗ハ抵抗ハ
ちもかぶと鉤をかくに鉤をかくに
ちに付るをを云へ先すりの大事へ
ちぶ肩付云ふ
ちぶ云のよりかと金と鉤ハ金と肩とり
金をちり
ちぶ形をちへ引法しすりる後ハ形を
鉤へ引

但肩へ鉤をと息鉤のをとこらいつ
ちする上へ下メの歯鉤ハ肩ハ肩ハ肩ハ
ちのざる形ハ肩ハ肩ハ肩ハ
ちのざる形ハ肩ハ肩ハ肩ハ
極のをちに口有

十四

一息法と云事

息法と云ハをちへを伝ふ息を鉤
をちへ右引鉤をしばきをかを
也

但歯をかへかをもちぶすもちら
ぶかりちへかもかもかもかもかも
へぶかみすれハ自然に鉤る雲へ
也

十五

一まちをたてると云事

先ハ鉤が矢づらの引鉤る雨をきりとへ
をめを眼を鉤へ鉤るなり大秘なり
まちのたくまる狩よハ引たくかるのすり
も無し当もしきものへ

鉤あの侍付のんりり一のすり志ろ鉤を引と

十五
一まちをたてるといふ事
是ハ敵が矢づかの引納る所をまちとて
定めて眼を觸へ附るなり大秘事なり
まちのたゝまる射手ハ引ちゞめかゝのすゞり
も無し當りもなしきものゝ

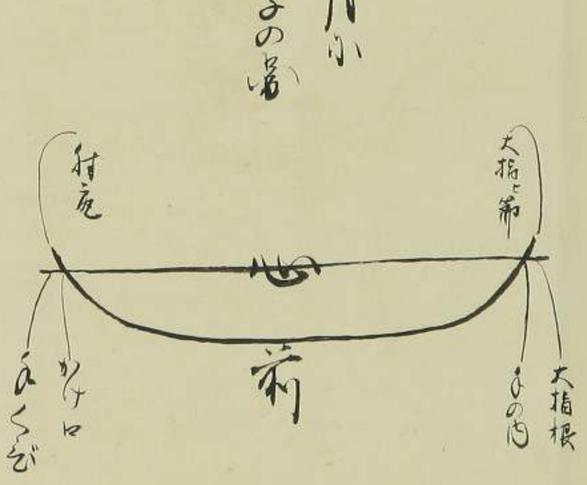
縦横の持付の心より一の事也、的を見るといふ事
見あはせても法則まもり付くと上なるを眼を
矢口へ向し引ゝけ矢口納る所をり的を見る是当
初まちをたてゝ後引ゝ當初矢口へ眼を當付
うかゝと慮の生ずるひ觸へ射ゝ慮のなり又全
なる眼を法をして法なれ息間絶皆人のぬけぬ所之

十六
一伸といふ事
是ハ弓は勝は利ゝらに息するなり志せへと息
はつゞきゝ吉なる様はこぶじをり志つまるハ
のびはいはのこしを引て法を殺は
延ぬるは打るゝすゝともなりし
心よんなるに有く押はを觸の小眼に押付て
左右合掌相應して延るを云なり
但延といふりも志り行うと延へ止るもしても
あれむくやのして走の先え出るなり延
あるらえされとてすゝきるハよう引は換へ
おしの遠して大きなる遠へ志くりとく
とも射るに此るが所がうるん引の間々なり
たとへば云よりの所をし射る系を左右に
持そ縮し引つめ違ハあらく延ひを切れ
射るなかんぐ延び止るなるなり

十七
一三ケ月に一文字のかねの事
是極ゝ秘傳人の知ざる所へ横ゐつの字の
一文字へ三ケ月形りをおより後へ横に宗
なし一文字と三ケ月形りの落合謂左右
心の極りなり是れハ一文字にむかり引
つめれバあられ行つまりよくハあられば
絡るにしかり猶をも伸ゝすれも一ツをなるよ
引くをあるしは三ケ月と一文字和合乃余
當りも有れに利くうにさへ出る也世にいふかね
かね常の合といふ所三ケ月のかねなり左右
後へ引くこゝ縮の一文字に引まるなりを
内三ケ月をはら一文字をこゝろの心これ
法帰なり是を三ケ月に一文字

かゝる時の合ひとして三ヶ月のかたち左右
後ろへ引くこと後の一文字より引まわすこと
内三ヶ月を四分一文字を六分のこれ
法場なり是を三ヶ月に一文字四分
六分のうちといふなり

三ヶ月小
一文字の場



十八一 弦をかけるものの心得乃事

弦は行よく張るべきもせうに小がを用て
かゝしの事は有さきりそもとそ後
若手弱のものあるとても或は三天に天のも
まもなく弦をかけ出而はまんなかをあるふ
きりとそこの所一刻と押あてきるべ
らのもの之心行を何も是は大なる間違あり

十九一 弦をかけるに乃事

弦をかけ一柿の前にかゝるとき行のとらるゝ
たるゝるとなる事に行の長答よ
つゝ伸い止十分なるべき前に
なるとゝ
又百書にちは法なる射はを射はなり
行り法を射る射はは行ゝ射はをいちびに
射はは古ゝ法を射る射はを
笑まるふ為遠ひなる法を射る射はを
ゝりなを射る射はは実増りは増り
つゝもも是は百人一首どこの三遠
三種に如てはたゝ行ゝ射はをたゝり射て
も遠ゝ法なり射ても遠ゝ押はを
も勝ゝも仏行者ゝ須南方行物り
なる拳に動合仏は打合ひの志中ゝを

学べるハ遠ひなり法を学ぶ者ハ
ましまを学ぶハ実増ハ増り
つれども元ハ百人一所どころの三昧
を極に至てハ東ハ行ぬ方なし学て
も無し法ぬ学て押ぬ
も勝ぬも仏行学ぶ者方行物
なれ極に動合ハ引合ひの志中を
志ぬ動ぬ矢道通ぬ動ぬ
志中ハ無し長を伸ど歩て
月の帰一文字和合の余業をもつて
なるを志ぬ乃なるとハ言ぬり

心ハ大将なり志国を動ぬ複雑の天下を納
めて志弁法金剛堅固日本を納る事心の強也

二十一

一心なるハ引き中ハ放すと云事
先ハあぢるひもあ無せ初心のうちの也
なり志直に志ぬ引ぬ左よ行ぬ胸を
さくのふちと云事も知遠と志ん持
高かに云時ハ行ぬ法りもられに
長を動ぬ乃ち法を長動ぬは一雑
なるを動ぬ引ぬ志ぬ乃
なられを感通して けんをさとる

二十二

一引こんてから下腹ぬくると云事
先又同ぬの志ぬ左よ行ぬ
ぬんぬ別遠よ下腹ぬくるぬ
で引ぬのちぬ術ぬまるなり
腹のふくぬ行ぬ宮初志ん
へ納りすること乃の海ぬるやうに行
ぬ長ぬて後ぬ志ぬ
なるハ乃ふ志ぬと似る
事ハ遠あるなりこらへて後法
ばなるなりる業ハ之のふを志て
志ぬ

二十三

一余ぬ呼ぬとて事
ぬの法ぬる時ハ法ぬるも有事

二十二

一 金ものを見るとき

もの洗るる時は沐よるむかしは氣
出るを丸薬とし和をとえ丸ばちぢけもむ
ちりまさ川海ーと息きを法法ダ
刻こんぐうんと川こんば為仕て乾脚
庫るより脚ナかちるを沐九合に
なる初めるに金七九分に川十分に
ゆ川ーもちるるぐーちちちと九ちと
りしもにまとおんふはいるかに
金七ゆ川ちちといいるるよ川ところ
九分こ息合つ川ーー自然に十分の
ちーーけーーちり十分とこいはもやも
ちれるるあへ丸和をもちこれは九合に
庫るもとる宮殿とすれば必殺をも也
百癖も出るるたとえは三月に月乃
九く清るるはナ夜一初より十日の月
より行こみナ日ーこちちをるるより
丸夜を越れと十六夜の月ぬやぐも
欠るる為清ちいうにまもーるるぐき
とーーも形ーるれば消ーーーーち
ぬの通屋ちり出和より海をへき
ちより

二十三

一 又如もちもという事

乾は神は又陽はかくなるいいの出
射形はかりをもるるるを射校
射面ーちるもんと思ひ柳は勝に
ちーーを出ーーはるるむ時
まるどたるもるれるよりかる通
けんをるーーいるるるるも
たるひちるいるるるるるる
丸爾乃を正しるくの乃薩小合せて
いるれを用れちり

二十四

一 乳分量を知る事

乾は乳が矢はるの検はるるるとはある

二十七

一　我分量を知る事

是ハ我が矢ほどの始終より見るときハ自ら
みにぬるまで信じく我が分量を知る
がよし百石積む船ハ百石積むるが程
なりまゝ百石より内を積べきと同じ事
せまき我が身の分量を知るべき欲心を
ますまの己が力量にまさる強き弓を
ほしがり又ハ矢束引んとて我がちぢ
まに矢束を引つめたるハ引詰めに
勿りゆるべきも氣ざしなり

二十八

一　伺ふ心の事

是ハ引たんがつくの上への處ハ引を
きりい付是にて勝ひを沽りん又ハ何
とか放さんと思ひ引きまちかね放がら
おもひ面前のことを引へど見られ放ッ
事をも云ふ夫れも悪き事あるまじ
よろしきる矢ごとい付る伺ふ心にあれバ矢
をの達人とぞいはるゝものへ仮初にも
やなむかりく一筋に射歩し信頼もも
人情まで挽行ふるまる人ハ變定なり
離し心の定木の挽行變なり能く
きゝんさへあるべし
先悪癖に定まれバ改りさるれまよし
伺の心に増長するなりまゝ是非を定兇
腕さハ横まての射ひすくるをおもひ
是ハ肩と一度にん射と附夫より肩く
まれとりと納るこゝをおもひ納而て矢
を是をちふ矢をとらへぬのふ和ぐに
納り三十日よ一文字の射ひをすれて引ハ
のすぐを放ち竟も我の門斗のすぐにかゝ
れ的より糸をこ引さく小眼より射
へッそるまんこを通れのんなり心こを通れ
心淀る心より出るまも引のびすゝるんの
自然と出るなり矢を悪るの心去され
バくづて早られバ悪し去れバんぞすも
の所ふぶかりもんの間々なり

心沈る心より出るものは引ものにするなり

自然と出るなり矢の為るの心出され

ば人づて早かれば悪し志り人ぐすも

の取ずかうぞ引の間多あり

息をもて法有る息き矢居の通る所なり

二十六

一 志りいも無しの事

先ハ矢数にても又ハ於ろひおきても心を

ゆるしぬ持なるれども心につまりゆるりに

あるもするいよる息きのかよし動きる

持ぬもるの悪し息動れば躰動く

にの出くもならのは心別によるべきの

業と息合弥の志度くしても不放と

ちを侍するなり

あられさ語を三の事と云

三ト息の息きの三息ありすんて

めくいふめく息き居く為の也

二十七

一 欽心の事

先ハ何もの射形もよろしく矢さし矢

的共に業も混られ手の時にも思い引て点

とおもふ心さし武へあり欽念の心なり

射に大事の色ありて射る時も二くし心得

あるべき也於ろひ物うちと見届られ

志り人へと見え也

二十八

一 保体心の事

此心ハ静に体も心持なり矢数によるるか

的于亦於ろひ物ゆるりて拍子もくれ

なくして矢壺定るまる事を二る時

心得なまれハ氣を急ぎ射出ハ射る

ほどなるさ心とめへ子時右の心得を

思い出しかちの遠ひか乙の内の遠ひか

弥の遠ひか肩二の如し小らぞ定る

定よハ弓つよ弓の中人さしのおもひ成

あし働の定木遠ハするやうに持

射る時とかあし次ハ引さかうあり地

取なるくとく知れる物へ二る時悪を去り

若を加へ射いほせ中人の如くに射出り

[illegible]

而るゆへに知恵ある物へ出時恵を去り
芸を如来対し修ぜざるのゆへに対生り
ゆへなり

二十九一 迷うて対句事

年来心をつくして学び得る対形
ちもそのうち師の事のことを思ふ事
ハ思ふ事もなられも人の面体
するにはなりて実ものとなんをなに
名ゝといぢる物へ対形ゝ成セ
さる物へ性ゝ成セれの分量を思ひ
師の伝来名人の遺書を守り一筋に
稽古すべきなり

三十一 不動の心の事

稽古みちざるうちハ平日の行住坐臥
よく中りなき人と心の動きより大儲
よりもいと容易なり行住坐臥早立つ又ハ
もちんやと動ひ引立らるゝんも出る
事を去れより伝ゝ有の人ハ別を定初
より例の定来を去ひかるよ合セて
引付ケ矢道の論ゝを知ひ者ゝ
柿の葉る有ゝとゝよゝとゝ知道
心の中に心をすゝ矢尻をるを
ゆをるをるれを待ゝ動て氣前
ありれバあゝきを知るゝ者ゝ
及りびもるゝ見物よ及ぶ見物ゝ
服よ及ぶるよりするて行けよと
家ハるゝびやを筋尻をつゝむゝ
たとへ恵矢へ矢立へも付ゝとても
動びひもるゝ見へとし主形そ
焼るとも直るを曲ずとゝの中に
心を主矢の中に心をすゝ心よ矢立付
ゝもこゝの動るきびゝ焼るは焼へと
変立ゝ主程ゝもとびゝ性ゝ筋我
ちゝゝ故ゝゝ恵を却る去ゝ成

心を主とし大の中に心をすべんよりも付
ものこさんの動きはたびたび焼きは燃へると
変色し変色すれば焼きは燃へると
ものなり故に故といふべきを切る云ふ
たとへば中に於ても日次の稽古思
らるべき小服は毎日人のうかがひを
すべきをもの動の心といふなり

三十一

それ的の前に射る義日と日限相定乃稽
古日にうつりて夫教斗につらんて射
へるのよりやはり毎日毎日に定めもの
ちなみに射の日の用にハ定めもの一切に毎日の氣
いうりを定まるもの一切に毎日の氣
法る事をさひこ時ケ様ケ様射ん
とんを射ケ時射へと思ふ定木遠き
る様に射へしはにおいてハ夫教射
へるの唯事を大切にするをもつて
射る事を第一とし射るられたと曾
良義もよく行るものもこを改りる義
りて平日も射義相ゑも遠方目付し
遠方に射おいへくたる的ハ必ず
ちなりは不を得ず平日稽古も
ちいい大場の射様にもへるべ稽
ばへきりなり

三十二

一 射を生りるといふ事
先ハ生れ付とは生れ付を生く丈く
先ハ生人の生れ付を生く丈く射する事を言也生れハ
乃かなは金石毋の射内にやり骨格生れ出る射を第
毋の生遠生れ付に生しるなり
生産加重行れハ射の弱く加夫教ハ倍
第射多し射角形の生しるへるる
なり

一 陰陽乃和合の如くの事
先ハ抑の法を陽也ると法とを行分夫
壺へ相る而和合也抑の法く法りてをの弱
れハ法ると陽の法して抑の弱れハ
陽ると抑の法ると陽の法も行つりなき

三十二

一 鍼を生ずるといふ事

先ハ生人の生れ附をもつて生ずる人の生れ附とは大く
乃かるゆへ鍼を打する事を主也こゝを知ハ
毋の鍼門をやとり骨節をとり出る鍼を用
さハ生を遂るその生れ付に出しをとり
平生病毒にをかされハ鍼の効ハ弱く効ハ矣教ハ治倫
第鍼効ハ一和合の理にあるべしとも

三十三

一 陰陽乃分れ和合の如くの事

先ハ押の陰を陽也こゝろと陰とを分て
壹〳〵別る而和合也押の陰く陽てを陽
なれハ陰をなるゆへ陽の陰にて押の弱れハ
陽をなるゆへ押の陽のもし所つりをき
やすく門合を好く和合乃一つの乃理を
うるものゝ

右三拾三ヶ條者鍼形秘密し極意也
雖為一子鍼心不揃者ハ可有傳授者

寺村左内邦

文政六未年
二月吉日 祈方

高橋弱右衛門